

ねCTVから15mmの範囲内、左方向に関しては20mmの範囲内であったが、腹側方向では9%、尾側は7%の頻度で20mmをこえる偏位・変形が検出された。【結語】コーンビームCTを用いた胃の偏位、変形の検証は有効であった。呼吸性の頭尾側方向の移動に加え、腹側方向での変形が大きい症例もあり、左右方向のビームを用いるときには特に慎重に検証する必要があると考えられた。

〈一般演題III〉

座長 中島 陽子 (群馬大医・附属病院・看護部)

9. 子宮腔内照射を受ける患者の苦痛と不安の要因と看護介入の検討

塩川 忠徳, 中島 陽子, 井上エリ子

(群馬大医・附属病院・北6階病棟)

【目的】子宮腔内照射を行う患者の苦痛と不安の要因を明らかにし、腔内照射を受ける患者に対する有効な看護の方法を検討する。【対象と方法】子宮腔内照射を受ける患者1名に半構成的面接を行い、その結果を質的帰納的に分析した。【結果】患者の苦痛と不安の要因は、〈鎮痛剤と下腹部痛に対する不安〉、〈治療中の腰痛〉、〈ブゾ診の不安〉、〈医療者への希望〉等8つのカテゴリーが抽出された。1回目の治療では治療のイメージ化ができていない中で治療による疼痛を経験し苦痛と不安があったが、患者の希望と疼痛に合わせて鎮痛剤を投与することにより鎮痛効果が得られた。【まとめ】患者の希望や苦痛の状態により鎮痛剤の投与を工夫・調節すること、治療開始前には治療の内容を具体的にイメージ化できるようなオリエンテーションを行うこと、治療がスムーズにでき患者の不安を軽減するためには、病棟と治療室との連携が必要であることが明らかになった。

10. 乳房温存療法後の患者のQOL及び身体的変化についての実態調査

小俣 明子, 福田 淳子, 茂木百合子

(群馬県立がんセンター)

放射線・内視鏡外来看護師)

玉木 義雄 (同 放射線科)

【目的】放射線療法を受けた患者のQOLを評価し、身体的変化について実態を調査した。【対象・方法】平成19年5月から平成20年8月の期間に、乳房温存療法を受けた患者100例にアンケート用紙を郵送。日本で使用できる乳癌患者用のQOL尺度のなかで、QOL-ACD-B³⁾の調査票に、乳房の変化と、身体症状で気にな

ることについて記載の項目を追加し、調査。【結果・考察】66名から回答あり。全体的には74.9点という高得点でQOLが高いという結果だった。しかし、胸、腋の痛み、しびれがある、傷痕や胸の形に満足していない、皮膚症状が気になる、痛みがある、については個人により満足度の差が伺えた。乳輪の変化については、色素沈着が多いものの、脱色の症例もあり、起こりうる副作用として情報提供が必要と思われた。

11. 群馬大学重粒子線治療電話相談の現状と今後の課題

中島 陽子, 篠田 静代, 加藤 康子

秋和 香代, 井上エリ子

(群馬大医・附属病院・放射線科外来)

大野 達也

(群馬大学重粒子線医学研究センター)

【目的】重粒子線治療電話相談の件数及びその詳細を把握し、今後の運営に関する課題を明確にする。【方法】平成20年10月から平成21年1月末までの電話相談の件数、相談内容、相談者の背景などを集計し分析。【結果】合計81件の相談があり、1件当たりの相談時間の平均は7.3(2-20)分で、相談内容のほとんど(61件)が重粒子線治療の適応に関するものであった。相談患者のがんの部位は肺がんが13名と一番多く、次いで大腸がん、前立腺がんであった。相談の結果は、用件済みが29件、折り返し電話をしたもの14件で、そのうち適応なしと考えられるものが19件であった。相談を知った経緯は、インターネットが一番多かった。【まとめ】件数が増加していることや、1件あたりの相談時間が長いことなどから、外来での相談業務の改善が必要であることが示唆された。また適応外となった患者のフォローも課題である。

〈一般演題IV〉

座長：江原 威 (群馬大医・医・腫瘍放射線学)

12. 婦人科がんに対する⁶²Cu-ATSM-PETの初期経験

清原 浩樹, 加藤 真吾, 大久保 悠

吉川 京燦, 岩川真由美, 鎌田 正

(放射線医学総合研究所)

重粒子医学センター)

大野 達也, 田巻 倫明

(群馬大学重粒子線医学研究センター)

【背景・目的】腫瘍の低酸素は治療に対する反応性や予後の悪さと関連している。⁶²Cu-ATSM (⁶²Cu-labeled Diacetyl-Bis (N⁴-Methylthiosemicarbozone)) は選択的に

低酸素細胞へ集積することが知られている。当施設で行った婦人科がんに対する ^{62}Cu -ATSM-PETの初期経験について報告する。【方法】2007年4月～2008年12月までに当院で放射線治療を行った婦人科がん症例のうち、試験に登録することを同意した症例に治療前後に ^{11}C -Methionin-PETと ^{62}Cu -ATSM-PETを行い、分析した。【結果】現時点での登録症例は17例。年齢の中央値は64歳(39-74歳)。子宮頸部扁平上皮癌：子宮頸部腺癌：悪性黒色腫=9:7:1例。治療方法はphoton:carbon ion=3:14例。全例で、MRIで確認した腫瘍に ^{62}Cu -ATSMの集積を認めた。【まとめ】いずれもアミノ酸代謝のPETとは異なる画像が得られた。腫瘍内低酸素領域の評価法として今後さらに検討していく必要があると考えられた。

13. 腔内照射に組織内照射を併用した image guided brachytherapy の初期経験

若月 優, 大野 達也, 吉田 大作
鈴木 義行, 中野 隆史

(群馬大院・医・腫瘍放射線学)

【目的】子宮頸がんに対する腔内照射では、腫瘍の大きさや偏在によっては十分な線量を投与できない場合がある。我々は、定型的な腔内照射に組織内照射を加えることにより線量分布の改善ができた症例を経験したので報告する。【症例】症例は53歳女性。子宮頸癌IIIb期(FIGO分類), 扁平上皮癌。タンデムとオポイド挿入後needle刺入を追加した状態でCT撮影をおこなった。線量分布の解析は腫瘍体積(GTV)のD90, 膀胱と直腸のD2ccを評価した。【結果】腔内照射のみの場合, D90, 膀胱と直腸のD2ccはそれぞれ3.1Gy, 5.9Gy, 4.4Gyであったが, 組織内照射を併用することによりそれぞれ6.4Gy, 6.0Gy, 5.3Gyとなった。【結語】組織内照射の併用により, 腫瘍に対する線量分布は良好となった。

14. 当院における前立腺癌の放射線治療成績

白井 克幸, 村田 和俊, 北本 佳住
樋口 啓子, 玉木 義雄

(群馬県立がんセンター 放射線科)

【目的】1回3Gy, 週3回, 総線量69Gyを用いて治療

した前立腺癌の長期治療成績と有害事象について解析する。【対象】1997年から2007年までの64例で, 前立腺癌新鮮例は41例, ホルモン療法不応例は23例であった。治療成績はKaplan-Meierで解析した。【結果】全症例の5年PSA非再発率と5年原病生存率は69%, 87%であった。新鮮例とホルモン療法不応例での比較では, 5年PSA非再発率はそれぞれ87%, 34%であり, 5年原病生存率はそれぞれ90%, 81%であった。Grade2以上の急性期有害事象の粗発生率は尿路障害28%, 腸管障害5%で, 晩期有害事象の粗発生率は尿路障害8%, 腸管障害は28%であった。【結論】新鮮例の治療成績はホルモン療法不応例に比べ良好であった。晩期腸管障害は過去の報告とほぼ同等であった。

15. III期非小細胞肺癌に対するCDDP/TS-1併用療法の同時化学放射線療法の第I相試験

江原 威, 河村 英将, 吉田 大作
高橋 健夫, 中野 隆史

(群馬大院・医・腫瘍放射線学)

【目的】III期非小細胞肺癌に対するCDDP/TS-1併用療法に放射線治療同時併用時のTS-1の最大耐用量(MTD), 推奨用量(RD)を決定する。【方法】放射線治療開始日をday1とし, 同日からCDDP/TS-1を同時併用する。CDDP(40mg/m²)はday1, 8に投与し, TS-1はday1から2週投薬・1週休薬とし, これを1コースとして, 2コースを同時併用する。TS-1は50mg/m²から10mg毎に増量する。放射線治療は1回2Gyの週5回法で60Gy(予防領域は40Gy)とし, 正常肺のV20を30%以下とする。【結果】これまでに10例が登録された。TS-1が60mg/m²で2/3の症例に血液/骨髄系の投与制限毒性(DLT)が認められ, 50mg/m²でのDLTは2/7であった。従って50mg/m²がRD, 60mg/m²がMTDと考えられた。重篤な非血液毒性は認められなかった。【結論】本プロトコールではTS-1は50mg/m²がRDと考えられた。